

虫も事実から学ぶ  
(年取るといふこと日誌から)

CL教育研究会 遠間美保子  
amhotm@gmail.com <http://docl.jp>



2014/04/06

満開の桜の花びらが小さな風に吹かれてひらひら舞う川べりにさしかかる。どこからか通る声の唄が聞こえる。川の向かい側の道路を自転車に乗って、野球帽をかぶった中年の男性が気持ちよさそうに春に浮かれたように歌いながら通り過ぎた。すると川面からグエグエと声がして、鴨の一家の一片が声をとぎることなく歌っている。古木の桜が咲く高校のグラウンドでは運動する生徒の元気な掛け声が上がっている。人も動物も桜を謳歌しているようで、自然に心が浮き浮きしてくる。心が謳っている。これが春という事実からのプレゼントか。

4/10

広い寺院の奥まった小高い丘は大きな樹木に覆われていて、宝物殿まで登り坂になっている。林の反対側の小道から高齢の夫婦が連れ立ってくる。奥さんが「こんなところ知らなかったわ。台所から出たことなくて」とご主人に話しかけている。普通寺を訪れる人はこの小道を通ることはないから近所に住んでいる人に違いない。とても健康そうだし、正岡子規のように病気で家から外に出られない人には見えない。へえー二十一世紀の現代にも一昔前のまさに家内の生活をしている女性がいるのかと驚いた。

5/06

境内で家族連れがさんさんごご桜見物をしている。6歳ぐらいの女の子が走る後から空の乳母車を押してお母さんが桜を見ながら歩いている。そのあとからやっと歩き始めたばかりの一歳前後の男の子がよちよちと今にも転びそうに歩いてくる。5m位前に近づくとその男の子と笑顔を見ている私の目が合った。その子もニコッと笑いながら、両手を前に差し出すようにこちらに向かってくる。「がんばれ、もう少し」「ハイタッチ!」と片手を合わそうとしたら、突然すんと尻もちをついてしまった。両足を前に出して座ったまま、ニコニコ顔が怒って泣き出した。前に歩いていたお母さんが戻ってきて、「タッチできなくてくやしいんだー」と笑いながら抱き上げる。すぐに泣き止んでお母さんの肩に頭を擦り付けて、私の方に照れるように笑顔をくれた。自然でかわいい変化のプレゼントをいただいた。

8/15

早朝5時15分、お盆休暇で人通り、車の通りが少なく交差点で左右を見ても車が見えない場所もある。それでも通勤で駅に向かう人がぼちぼち。住宅街の脇道はまったく人通りがない。前方から中年の白いスポーツシャツの男性がジョギングで走ってくる。私の横をすれ違う筈とそのまま歩いていたら目の前に来てぶつかりそうになり、避けると、その人の手には白い杖が握られていた。街中で目の不自由なランナーにはじめて出くわした。年に一度のもっとも安全な環境の日でランナーには貴重な日にちがいない。よけながら「ごめんなさい」と不注意を詫びたが、開きめくらは注意散漫と思ったにちがいない。

9/9

医師の容姿と建物の古さから60年は続いてきたと思われる町の診療所・外科医院。がらんとした待合

室に扇風機が一台とあせた鶯色の長椅子が3台。クーラーはなく、玄関のガラス戸は開け放ってある。長椅子に座る間もなく、すぐに看護師さんから名前が呼ばれて診察を受けられるほど患者さんが少ない。が、診療時間の9時には始まっていて、9時を回った頃に訪れても人影が見えなくても、ドアが開いて診察を終えた患者さんが出てくる。9時半を回ると一人また一人と患者さんが途絶えることはなく現れる。

高齢の男性がサンダルを診療所のスリッパに履き替えて、待合室に出てきた看護師さんに、「看護婦さん、今日は3点セット（たぶん診察券、健康保険証、検査表、前回までは何かしら忘れていたのかもしれない）持ってきたから検査してくんない？」

看護師「やらない」とはっきり断る。

患者「えー、どうして？」

看護師「気分がのらないから」と診察室に消える。

患者「気分がのらないんじゃないしょうがないな」と、間髪を入れず、

看護師「〇〇さーん、第2診察室にお入りくださいー」

患者「あれ、やらないって言ったのに名前呼んでるよ。きょうの料金は高くなるぞー」と診察室のドアに向かった。

二人のこの軽妙な掛け合いに大笑い。昔の浅草界限の人情交流に触れたようだった。

11/08


### カマキリ災難から学ぶ

これまでやぶ蚊くんらも元気に飛んでいたが、11月になって朝晩冷え込んできた。それでもお天道様が出る日は晩夏ほどの温かさだ。そろそろ冬支度で土にかえる季節になった。陽当たりのいい縁側に移動していたらガラス戸が開いて部屋の中の温かい空気に覆われて、思わずガラス戸の内側に入り込んでしまった。「あらまっ！」と人の声がして、手で掃われ、床に仰向けに寝転がってしまった。足をもがいても床は滑って元に戻れないでいると、また人の指が伸びて私を挟もうとする。こんな敵は今まで出会ったことはない。なすべきことはできる最大限の体制で臨むべきと鎌を立てて人の指に絡めると「ダメっ！」と叫んで私を外に放り出した。突然大きな飛び石に投げ出され、驚いたのとこれ以上何をされるかと二つの鎌を立ててじっと石の真ん中で身構える。どれほど大きな敵か想像もつかない。目をこらしても全体像がつかめない。数分してもなにも起こらないので、鎌をおさめ、用心してそのままさらにじっと佇む。敵はこれ以上私に襲い掛かってこないようだ。10分ほどして周囲の安全を確かめ石を降りて草むらに入った。何事もなかったかのように草むらの周囲は静かな佇まいだ。今度の事件で人の建物の中に入っただけとはいけないことを知った。どんな怪物がいるかわからない場所だ。ガラス戸が限界線と覚えた。

12/08

歯磨きをしながら今日のなすべきことの一つ、物置の片づけについて考えていて、いつもと歯に当たるブラシの感覚が違うことに気づく。六十肩を患って以来使っている電動歯ブラシのスイッチを入れ忘れて磨いていたのだ。一年、一ヶ月、一週間、一日の目的をつくるのも必要なことだが、目の前のなすべきことをまきに行っているときには、そこに注意を払うことが肝要。人はときどき湧いてくる思考に意識が向かう。それも自然なこと。完璧な長時間の注意力は強く願ってもない。

(千葉県市川市CLインストラクター)

 [目次へ戻る](#)